

【高校生の部】奨励賞

『余命 10 年』（小坂 流加／著）

青森県立八戸商業高等学校 1年 蝦名 佳蓮

皆さんはあと 10 年しか生きられないとしたら何をしますか。私が薦める「余命 10 年」の主人公、高林茉莉は 20 歳という若さで、余命 10 年と宣告されてしまいます。茉莉はこの 10 年で死に対する想いや人間関係など、彼女の周りを取り巻く様々なことが変化していきます。一つの出来事がきっかけで周りとの関係性が変わっていくことは、皆さんの学校生活でも起こり得ることでしょう。私も実際に起きた仲間割れで交友関係が崩れたことがありました。そんな体験を踏まえながら読んでいくと、自分を支えてくれている家族、友人がどれ程大切なのか、まだ生きることの価値を見いだせると思います。今を生きることに行き詰まっている人達に読んでほしい本です。

『内戦の地に生きる フォトグラファーが見た「いのち」』（橋本 昇／著）

青森県立八戸西高等学校 1年 前山 朝香

私達日本人は世界のことをどれくらい知っているだろう。著者が間近で見た「貧富の差」。多くのフィルムと著者の言葉巧みな表現にあたかも私がフィルムの中の人と同じ場所にいるかのような感覚があった。私は今の世界の現状にあまりにも無知だった。貧困や飢餓といった身近に感じないこの言葉の疑問を一瞬で吹き飛ばしてくれるのがこの本だ。私はこの本を読み、自分が日本に生まれたことが奇跡のように感じた。今ある事すべてが普通ではないと思うようになった。だから、毎日が退屈と感じている人にこの本を薦めたい。死と隣り合わせで暮らす人々を見て、私達は生きているだけで 100 点満点なんだということ、多くの人に知ってもらいたい。

『ひと』（小野寺 史宜／著）

青森県立青森聾学校 高等部 3年 北畠 慎太郎

この小説は二十歳にして天涯孤独になり、大学を中退し、惣菜屋で働き始める柏木聖輔の人生を描いた物語だ。客観的に見れば、主人公は不幸な身の上だと捉えられるだろう。私は人生には勝ち負けがあると思いき、他人と比べて勝手に憂鬱になることが多かった。しかし、「人材に代わりはいても、人に代わりはいない」という言葉から幸せはいつもそばにあることに気付かされた。惣菜屋をきっかけにひとの温かみに触れ、一つの幸せを自然と見出した説得力のある言葉だと感じた。人間は無い物ねだりしてしまいがちだが、幸せの形はお金だけではない。そして、ひととの繋がりが人生を豊かにすると、主人公の生き方から学ぶことができる一冊だ。

『魔王』（伊坂 幸太郎／著）

青森県立青森工業高等学校 2年 田中 夢乃

この本は、深く考えすぎる兄と直感で動く弟、そしてその2人を取り巻く世間を描いた物語です。この物語は度々、周りに流されず自分で考えることの重要性を訴えかけています。私は、来年選挙権を得ます。投票に行くかどうか、何を選択するかを自分で考えて決める自信はなく、きっと周りに合わせてしまうだろうと思っていました。情報が溢れている現代で、自分で考え、自分の意思をもつこと。それこそが1番大切なことなのだと、この本を読んで気付くことが出来ました。物語の中では、世の中の流れを「洪水」とも表現しています。洪水に流されない強さはあるのか、と読み終わった後に問いを投げかけ、考えさせてくれるこの本を薦めたいです。

『お探し物は図書室まで』（青山 美智子／著）

青森県立木造高等学校深浦校舎 3年 中林 千花

この本は日々にやるせなさを感じ行き詰まった男女が、司書にすすめられた本を読み、前向きに変わっていくお話である。作中で司書が「書物そのものに力があるというより、君がそういう読み方をしたことに価値がある。」という場面がある。私はこの言葉がとても好きだ。私が今までいろんな本を読み感じてきたことは、たとえ誰とも分かり合えなくても、間違いではない。と言われた気がした。自分の考えに自信を持てなかった私にとって、背中を押してくれるあたたかい言葉だった。ちょっと行き詰まった時、この本の登場人物と一緒に、司書と本にやさしく背中を押してもらえるやさしい作品となっている。

『舟を編む』（三浦 しをん／著）

松風塾高等学校 3年 山本 大貴

「辞書は言葉の海を渡る舟、編集者はその海を渡る舟を編んでいく」この本は、辞書の編纂をすることになった馬締と、その周りを取り巻く登場人物たちの織り成す物語だ。辞書の編纂は骨が折れる作業だ。それでも馬締がひたむきに仕事を続けるのは、そこに情熱があるからだ。私たちの生活は多くの情熱によって支えられている。この本はそんな当たり前だけど大切なことを改めて気づかせてくれた。普段何気なく使う物の一つ一つに誰かが関わり、情熱をそそいでいる。その情熱がお互いを支えあっているのだ。私はこれから社会により深く関わる。仕事に対する嫌なイメージを覆し、将来に希望を持たせてくれるこの本をあなたに薦めたい。

『そして、バトンは渡された』(瀬尾 まいこ/著)

青森県立青森聾学校 高等部2年 中美 優太

この本は、家族や苗字が大人たちの都合により、何度も変わってしまった主人公、森宮優子が、それぞれの親と関わり、成長していく物語です。この本を読むと、今まで当たり前に存在していた家族の関係がいつまでも続くとは限らない事を考えさせてくれます。私も主人公のように家族と別れてしまい、母子家庭として育ってきました。その事もあり、優子の家族に対する問いかけや考え方に共感させられる話です。「子供と子供の未来を必死に守る」と考えるそれぞれの家族が優子に与える深い愛情、それを受けて優子がどう成長するのか、自分の家族とはどういう存在なのか、読んでいくほど感銘を受ける本です。ぜひ読んでみてください。

『かがみの孤城』(辻村 深月/著)

青森県立弘前実業高等学校 2年 藤田 あかね

瞳の奥底から何かあついものを感じ、鼻がツンとするのを感じ、肩で大きく息をすることで、この本を読み終えた時私は泣いているということに気づきました。誰もが一度は、学習機の左側をあけるとタイムマシンがあるのではないかと考えたことがあるでしょう。この物語は、そんなファンタジーの世界と現実社会に悩む少女のお話です。私は、この物語の「たかが学校のことなのにね」というセリフが印象的です。毎日通う学校での悩みは付きもので、悩みがないなんて人はぼぼいないだろうと思うけど、考え方や捉え方を変えることが大切だし、大人になるにつれてその力はもっと重要になるだろうと改めて考えさせられた、そんな一冊です。

『一切なりゆき～樹木希林のことば～』(樹木 希林/著)

青森県立大間高等学校 3年 泉 堅心

私は、高校1年生の時に樹木希林さんの演技を拝見しました。その時に女優・樹木希林としての人生観に心ひかれ、この本を手に取りました。そこには、人生の大先輩からの教訓が、6つの分野ごとに紹介されています。自分の人生と照らし合わせてみると、到底かなわない人生観がまとめられていますが、私の人生のバイブルとして時々読み返しています。今の私は、自身が高校生ながらに、多くの欲と感情を抱えているように感じます。時に理性を失い、反省や後悔する瞬間が多いです。しかし、この本を読み返してみると、そうしたことがどうでもよく感じられる、私にとっての魔法のような一冊です。若いうちに一度手に取ってみることをおすすめします。